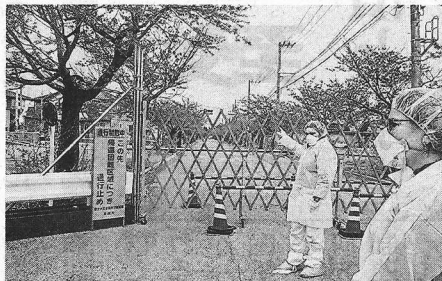


北海道へ避難している友人が、ウクライナ・チエルノブイリ博物館副館長とキエフ市在住の小児科医と共に、故郷の福島県双葉郡富岡町を訪れるというので同行しました。富岡町から避難されている藤田さんのガイドです。私自身、南相馬市を訪れる方のガイドをしています。他の地域で三十キ圏内のガイドをしている方のお話は初めてでした。

東北復興日記

88



「この先帰還困難区域につき通行止」

「津波で崩壊したままの入り口を取り囲み、異様な雰囲気でした」写真。

「もう傷つけ合いたくない。みんなと友達になりたいんだ。そして、この活動をいつか避難している人たちの仕事として後世に残していきたい」

「フレコンバツグ。ねずみや動物の被害、雨漏りで修復不可能な住宅、除染をしてもなお高い線量を映すモニタリングポスト。」

「住んでいた場所も避難したところも状況も違います。ですが、この惨事を忘れてほしくないという思いは皆同じなのだ」とつくづく感じました。そして互いに五十年百年のスパンで物事を見据えて



原発震災を語り継ぐ会主宰
高村美春さん

廃炉への道のり語り継ぐ

「たんですよ」と藤田さん。しかしその桜の下は同じ三十キ圏内に住む私から見ても除染後とはい

「め」という看板が立ち、厳重なゲートが家屋の入り口を取り囲み、異様な雰囲気でした」写真。

「津波で崩壊したままの入り口を取り囲み、異様な雰囲気でした」写真。

「もう傷つけ合いたくない。みんなと友達になりたいんだ。そして、この活動をいつか避難している人たちの仕事として後世に残していきたい」

「いかなばならないのだとも。」

四月二十六日、チエル

ノブイリ原発事故から十八年です。まだ終わっていません。私たちもこれから廃炉へと長い間見守らなければなりません。原発が動いてきた時間以上にです。便利さや豊かさを求めた代償に、苦しみや悲しみがあるということ。これを伝えるために、ここで語り続けていかねばならないのだと噛みしめました。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。